

## 幼小連携のカリキュラムについての研究 —「道徳性」「協同性」の育成—

中島 朋紀（初等教育学科・講師）・東 ゆかり（初等教育学科・准教授）  
荒松 礼乃（初等教育学科・講師）・白川 佳子（初等教育学科・准教授）  
西島 大祐（初等教育学科・講師）

### 1. 諸言（研究の背景）

平成21年4月より実施されている新しい幼稚園教育要領及び保育所保育指針には、子どもにとっての「発達や学びの連続性」を踏まえ、小学校教育との円滑な接続のために連携を図る内容が示されている。他方、学習指導要領においても、小学校低学年では幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校への適応、教科などの学習への円滑な移行などが重要であることが示され、幼稚園・保育所との連携が新たに明記されている。しかし、まだまだ連携のための体制や組織づくりなどが十分図られていないところも少なく、幼小連携の推進が課題となっている。

幼小連携・接続の課題は、最近になって取り立たされた課題ではなく以前より指摘されている。保育学研究をリードしてきた一人である倉橋惣三は、論文「幼稚園から小学校へ—幼稚園と小学校幼年級の真の聯結—」の中で「幼稚園と小学校を離さないで結び付けていこうとするには、二つの方法があります。一つは教育行政の上から教育系统と云うものを立て変えることでもあります。それから一つは教育の行政に於ける系統は必ずしも幼稚園と小学校とを一つに結び付けなくても、其教育の方法に於いて其関係を見だしていくということです」と述べている。なお、後者の方法においては、「八歳までの一系統、小学校低学年のありかたとして幼稚園でやっているのと同じようなプロジェクトの生活、自分の目的を自分で解決していく、あるいは具体的な製作の生活が本体となっていく時に、幼稚園と小学校との本当の聯結がつくのではないだろうか」と論を展開している（『幼児の教育』1923）。つまり、倉橋が指摘した点は、無論現代の保育・教育事情とは異なるが、戦前から幼小連携が大事なこととして認識され、小学校低学年授業の在り方の見直しと、幼稚園教育ではぐくまれた生活の一層の充実が小学校教育に求められていることにある。

幼児期の教育と小学校教育では教育内容や指導方法等の独自性があるが、子どもの発達や学びは連続しており、そもそも子どもの生活・生命（Leben）の連続発展観に立つと、幼稚園や保育所等から小学校への移行を円滑にすることは必然なことである。保育学研究者の荘司雅子も述べているように、子どもの健全な発育を促す過程において、「前の時期の成長が完成すれば、それが自然に次の時期に移行」し、「これが生命の自然の発達」になるのである。このような子どもの心身の成長発達や自然の内面的な移行を考えると、「幼稚園の教育内容や教育方針が、自然に小学校低学年に移行する」ことが重要であり、互いに教育内容を理解し、指導方法の工夫や改善をするなどして、幼稚園や保育所等と小学校との連携を積極的に推進することが求められる。

## 2. 研究の目的

幼児期から児童期において、子どもにとって「発達や学びの連続性」が確保される教育実践の展開が望まれる。カリキュラムという視点から、本学の教育環境は、建学の精神（教育理念「感謝と奉仕に生きる人づくり」）を基調とし一貫した教育・指導がなされている。つまり、本学は、子どもにとっての人間形成にふさわしい道徳性や人間関係の育ちを、集団的なマナーやルールの規範形成、他者とのかかわりを深めるための協同的な経験へとつながる指導の充実が図れる学びの連結の場でもある。

本研究では、「道徳性」や「協同性」を培うための指導内容や教師の役割が、幼小連携のなかで一貫性のある教育活動として位置づけられることの重要性について、またそれらを踏まえた計画的な指導や学習を展開していくための方法について、本学短期大学部教員および初等部教員により共同調査・検討することを目的とする。

## 3. 研究計画

- (平成22年度) ①先行研究の検討（文献・資料等）  
 ②初等部における児童の観察、授業参観・参加（道徳）  
 ③幼稚部・初等部教諭へのインタビューやアンケート調査  
 ④幼小連携の実践校への視察
- (平成23年度) ①幼稚部・初等部における幼児児童の観察、授業参観・参加（道徳）  
 ②幼稚部・初等部教諭へのインタビューやアンケート調査  
 ③調査結果の入力  
 ④幼小連携の実践校への視察
- (平成24年度) ①幼稚部・初等部における幼児児童の観察、授業参観・参加（道徳）  
 ②幼稚部・初等部教諭へのインタビューやアンケート調査  
 ③調査結果の入力・分析  
 ④研究報告書の作成

## 4. 研究経過と考察（初等部における幼小連携カリキュラムの取り組み）

### （1）カリキュラムの接続

本学園は幼稚部（幼稚園）と初等部（小学校）が同一敷地・岩瀬キャンパス内にある。そのため、年間行事に予定されている交流活動を行うときも、教師間で事前の相談を行うときも、すぐ訪問することができ、幼小の交流活動を行うに当たっては恵まれた環境にある。そのため、幼小の交流活動については、以前から何らかの形で、年間行事や教師間の共同活動として行ってきた。

幼児教育と小学校教育のカリキュラムを円滑に接続することは、今後の教育の大きな課題の一つであろう。しかし、最初からカリキュラムをつなぐことを意識しても、漠然としすぎてうまくいかないのではないだろうか。そこで、本学幼稚部・初等部では、幼児期から児童期への「接続期」における成長発達段階を踏まえ、教育の目的・目標は本学の「建学の精神」（教育理念）に基づき、次のような点で、幼小の接続を考えてきた経緯をもつものである。

- ・ 幼稚部・初等部（幼小）教員双方からの教育や子どもの発達の姿、指導の在り方、情報提供等の話し合い・研修を行う。
  - ・ 互恵性をはぐくむ幼児と児童の交流活動（年間行事、生活科、総合的な学習等）を行う。
- カリキュラムという視点から、これまで行ってきた実践を見つめ直すと、小学校への入学の意識が高まってくる3学期には「遊びを中心とした交流活動」や「小学校一日体験」を中心としたアプローチカリキュラムを行い、小学校入学間もない時期には、「新入生を迎える会」（行事）や「フリースアタイム」（異学年との交流活動）のスタートカリキュラムを行うというように、児童と幼児の気持ちを大切にしながらそれぞれの重点時期を考慮したカリキュラムやプログラムを実践している。

## （2）アプローチカリキュラム

小学校への接続のためのアプローチカリキュラムの中心は幼小の交流活動である。

### 【ねらい】

- ・ 互恵性のある交流活動にする。
- ・ 交流活動を行い、少しずつ段差を解消できるようにする。
- ・ 段差の解消だけではなく、段差を意識させることにも目を向けるようにする。

幼小の交流活動は、初等部の児童にとっては年下の子を導いたり、優しく接したりする経験を与えられ、また、幼児期の自分を幼児に投影することで自己の成長を実感することができる。幼稚部の幼児にとっては、小学校へのあこがれの気持ちを抱いたり、児童の活動を手本として、自分の活動に生かしたりすることができる。このような幼小の交流活動は、単なる交流にとどまるのではなく、お互いにとって互恵性のある交流活動にしていかなければならない。

初等部の児童が交流活動を主として実践する場合も、ある特定の学年のみではなく、様々な学年の児童と幼児が繰り返し出会うことでお互いの関係が深くになり、異年齢との交流でより多く学ぶことができる。それぞれの交流活動は、活動場所（幼稚部、初等部、他の施設）、活動の単位（個別・ペア・グループ・集団）、支援の主体（初等部児童、初等部教員、幼稚部教員）、活動の選択（自由遊び、企画された遊び、学習）などに段階をつけ、幼稚園型の遊び・教育から徐々に小学校型の遊び・教育になるようになる。

小学校入学を間近にひかえた2月・3月には、「小学校一日体験」（幼稚部との連携及び初等部新入生のための連携）を行っている。幼稚部の年長幼児が初等部にきて一年生と一緒に授業を受け、休み時間を体験する。この時期の幼児は、「小学校では、勉強をがんばるぞ」「小学校は、どんなところだろう」などと小学校への憧れと不安を抱えている。この不安の部分を解消したいということで、段差をなくせばよしとする連携の単純な考え方でよいということではいけない。幼稚園とは違う段差を憧れとして見ているものも多いはずである。また、子どもは不安という段差や危機という内面的な非連続を乗り越えるからこそ成長するという面もある。幼児に幼稚園と小学校の違いを入学前に知らせておく手立てとして、また段差や非連続に対する心構えとして小学校一日体験を行う必要がある。

## （3）スタートカリキュラム

スタートカリキュラムでは、遊びの環境や友達関係を広げ、集団生活に慣れさせること

をねらいとしている。

入学直後の数週間は、教師も児童も大変忙しい状況である。教師は、着替えやロッカーの片付け方から、机の中の用具のしまい方、靴箱の位置、トイレの使い方、登下校の仕方……というように、身辺整理や学校で生活するために必要なことを一つ一つ教えていかなければならない。入学したばかりの児童にとっては、今までやったことがないようなことも多く、戸惑いも多くある。このような生活が一ヶ月間近く続く。教師は、ばたばたとした生活を送りゆとりがなく、児童は、ずっと何かをしているために休み時間に遊ぶ時間もあまりない。これでは最初のおどろきの児童の気持ちも、だんだん下降ぎみになり、大変さばかりがつのようになることも当然である。そこで、高学年（5・6年生）の児童が1年生のサポーターとなり、小学校の教室環境に早く慣れること、新しい環境での遊びや友達関係をつくれるようにすることなど、「朝のサポート・奉仕活動」（入学後2週間のサポート）や「フリースアタイム」（月1・2回中休み、昼食・清掃活動）「新入生を迎える会」（年間行事）に取り組んでいる。

#### 「新入生を迎える会」

楽しいことから学校生活が始まることを体験させるために、6年生と1年生で編成されたグループで学校探検に出かけ、各教室・場所をまわりながら、異学年との交流活動（ゲーム・クイズなど）を行う。このことは、新入生にとっては、学校の様子やきまりを知るとともに、迎え入れる異学年との交流を楽しめる機会となり、高学年の児童にとっては、実際に自分が小学生になって経験したことをふり返る機会にすることができる。

#### 「フリースアタイム」

月1・2回設けられている「フリースアタイム」では、その活動を、まず異学年とのコミュニケーション・交流活動としてとらえ、なかよしグループ（1～6年生の児童で編成された集団グループ）での集団活動を行う。活動内容としては、休み時間の遊びを中心に、昼食や掃除の時間をなかよしグループで活動し、仲間づくりや集団行動の素地としての効果がある。遊びや集団活動によって、児童の発想力や協調性、忍耐力などを見ることができるとともに、遊ぶときのかかわり方を見ることで一人になりやすい児童や自分本位の行動をとる児童もわかり、きめ細かい支援・指導に生かすことができる。

## 5. 今後の予定

幼稚園では遊びを通して総合的に学んでいるが、小学校に入学した途端に学びが教科ごとに分かれてしまうと、幼小間の段差が大きくなる。そこで、今後は、本学の建学の精神（教育理念）や月訓を基調としたカリキュラムという視点から、道徳の学習、生活科を核にして、子どもが主体的に生活する上で基盤となる道徳的価値を学ぶ授業実践や指導内容の分析・考察、また幼小連携を目指す保育内容・活動の分析・考察との相互の関連性を検討していきたい。

## 謝辞

本研究を行うに当たってご協力いただいた本学初等部の先生方、とりわけ島崎真由美先生、美甘亜耶先生には、日常の教育活動においてご多忙であるにもかかわらず、授業実践の提供・参観、データの収集、インタビュー等、こころよく連携研究の時間をつくって

ただき、深く感謝を申し上げます。今後とも初等部教員と大学教員の協働的な教育研究への対話を基調とした本研究が、ますます子どもたちのために有益な研究となるよう研鑽を積む所存であります。

### 引用文献

- 1) 倉橋惣三著「幼稚園から小学校へー幼稚園と小学校幼年級の真の聯結ー」『幼児の教育』23(4) フレーベル館 1923年 133-139.
- 2) 荘司雅子著『幼稚教育概論』 福村出版 1967年 169.
- 3) 文部科科学省『小学校学習指導要領』 東京書籍 2008年
- 4) 文部科科学省『幼稚園教育要領』 教育出版 2008年
- 5) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『幼児期から児童期への教育』  
ひかりのくに 2005年